NEWS
The Kagawa Museum

vol.55
香川県立ミュージアム
ニュース
2021 冬号

Contents

特集

毎年恒例の特別展　はじまり と これから

・日本伝統工芸展のあゆみ

・県展「審査に関するガイドライン」の導入

展示室だより

高松松平家と県立工芸学校

Colors Ⅰ 色彩に遊ぶ ― 野見山暁治・木村忠太

Colors Ⅱ 響きあう色彩 ― 江戸健

調査研究ノート vol.42

香川初の映画館はどこか?

れきみんだより

収蔵資料「草薙金四郎文庫」をひも解く

山下義人　青藍蒟醤箱

大谷早人　藍胎蒟醤飾箱「茜」

第68回日本伝統工芸展　県内在住重要無形文化財保持者作品

現在の香川漆芸は、玉楮象谷（1806～69）が唐物漆器を探求し、得意とした彫りの技術を活かして独自の蒟醤、彫漆、存清の技法を確立したことにはじまります。蒟醤では、これまでに5名の人間国宝（重要無形文化財保持者）を輩出していますが、伝統の技を受け継ぎながらも、独自の表現方法を生み出し、現代感覚に溢れた作品を作り出しています。

特集

毎年恒例の特別展 はじまり とこれから ―日本伝統工芸展・香川県美術展覧会―

日本伝統工芸展のあゆみ

日本工芸会総裁賞　小林佐智子　風通織木綿着物「青海」

高松宮記念賞　高田和司　木芯桐塑和紙貼「蒼天」

文部科学大臣賞
三浦信一　黒檀嵌荘匣「深山の彩」

東京都知事賞
高橋阿子　蠟型鋳銅花器

昭和29年（1954）に始まり、今年で68回を迎える日本伝統工芸展（以下「伝統工芸展」）。高松では近年、1月の恒例行事となっています。今回は、全国10会場を巡回しますが、高松では昭和34年の第6回展から毎年開催しています（第4回展も開催）。高松以外で第6回展までに伝統工芸展を開催した地は、東京、大阪、名古屋、京都、福岡であり、全国的に見て、非常に早い時期から開催されていました。これは、高松が香川漆芸の地であること、日本工芸会の設立に、磯井如真、音丸耕堂らが関わっていたことが関係していると考えられます。

昭和29年3月に開催された第1回展は、文化財保護法のもと「助成の措置を講ずべき無形文化財」として選定された作家の作品紹介でしたが、第2回展以降は、重要無形文化財保持者、日本工芸会の正会員、支部会員、正会員等の推せんを受けた者の作品のうちから鑑審査を経た作品が展示され、第7回展から現在と同じ公募展となり、誰でも出品できるようになっています。ここでは、あくまで作品本位に鑑査されるため、重要無形文化財保持者の作品でも落選することがあると聞きます。

「伝統」という言葉には古いものというイメージがありますが、伝統工芸展に出品される作品は、決して古い技法や意匠を固守するものではありません。伝統工芸展の第6、第7回展の趣旨に「そもそも、伝統継承ということは、単に古い技術を修得し、これを墨守することではない。伝統は生きて流れているものであり、芭蕉のいわゆる『不易流行』である。換言すれば永遠にかわらない本質をもちながら、しかも流れる水のごとく一瞬もとどまることのないのが伝統の真の姿である。」とあります。

この趣旨は、文言の変化はありますが、現在に引き継がれています。この趣旨に基づけば、伝統工芸展に出品される作品は、伝統的な工芸技術を受け継ぎながらも、意匠・造形・技術といったあらゆる面で現代生活にふさわしいものであると考えられます。

みなさんの生活にふさわしい作品、お気に入りの作品を見つけに、ぜひ会場へお越しください。

（専門学芸員　髙木 敬子）

<参考資料>
『日本伝統工芸展の歩み』日本伝統工芸展史編纂委員会編集、社団法人日本工芸会発行　平成5年12月1日発行

特別展　「第68回日本伝統工芸展 」

会　期　令和4年1月2日（日）～1月16日（日）
会期中無休
開館時間　9：00～17：00（入館は閉館の30分前まで）
会　場　特別展示室、常設展示室4・5
観覧料　650円、前売・団体520円
※高校生以下、65歳以上、障害者手帳をお持ちの方は無料

関連イベント
講演会　令和4年1月8日（土）※詳細は8頁インフォメーションへ
陳列品解説　解説動画を当館公式YouTubeで配信予定

県展「審査に関するガイドライン」の導入

今年の第85回香川県美術展覧会（県展）の応募総数は1,044点、入選数は467点、入選率は44.7%でした。審査は7月27日からの3日間で、絵画（日本画）・絵画（洋画）・彫刻（立体表現）・工芸・書・写真の各部門でそれぞれ行いました。鑑査（入選作の決定）と審査（入賞作の決定）については、それぞれの基準を明確にするため、新たに定めた「審査に関するガイドライン」に沿って行いました。

香川県美術展覧会　審査に関するガイドライン

1　審査団について
（1）県外及び県内の複数の審査員により構成し、団長は県外審査員が務める
（2）県内審査員は、香川県美術展覧会に関わりのある作家等で構成する
（3）会派や専門性に関わらず、各部門とも審査員全員の多数決及び合議によって鑑査及び審査を行う
（4）団長は鑑査及び審査終了後、意見を集約してすみやかに講評文を作成する

2　鑑査及び審査の規準
鑑査及び審査を行う際は作品本位の視点により、以下の項目を考慮して総合的に鑑査及び審査を行う。
（1）作品のテーマが明確であり、感性や知性を刺激するものであるか
（2）時代性を反映した現代的な表現となっているか
（3）テーマにふさわしい表現手法と表現技術を兼ね備えたものであるか
（4）上記（1）～（3）のうち、特に優秀と認められる作品から賞を選出する

令和2年1月29日香川県美術展覧会実行委員会で承認

絵画（洋画）の審査風景
表現方法をじっくりと確認している様子がうかがわれる

当館のYouTubeチャンネルでは、各部門の審査を担当した審査員による受賞作の解説動画を公開中です。審査方法や作品の評価のポイントにも触れていますので、ガイドラインに沿った鑑査及び審査となっていることがより伝わると考えています。ぜひ、ご覧ください。

（主任専門職員　櫻木 拓）

絵画（洋画）
西村静美　蝕む

審査の結果、これまでの日本画の主題には見られない新しい表現をした髙嶋香子の「オカリナ・ラプソディ」や、コロナ禍の社会をテーマとする西村静美の「蝕む」などが香川県知事賞に選ばれました。このように、鑑査及び審査の基準を明文化したことにより、なぜその作品が選ばれたのかが出品者や観覧者に伝わりやすい審査結果につながったと考えています。

審査団については、各部門とも1名の県外審査員と複数の県内審査員で構成する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の流行という社会的な状況もあり、書と写真については県内審査員のみの構成となりました。審査団の在り方については、実行委員会等で検証し、専門的な知識を持った学芸員を起用したり、公開審査を検討したりするなど公正・公平で開かれた審査とするため、さらに変革が必要だと考えています。

絵画（日本画）　髙嶋香子　オカリナ・ラプソディ

当館公式 YouTube チャンネル ▶

展示室だより　常設展示室1

高松松平家と県立工芸学校

寛永19年（1642）から、高松を城地として東讃岐12万石を治めた高松松平家は、明治4年（1871）の廃藩置県に伴い、東京への移住を命じられます。その際、松平家の財産管理を行う松枝舎（まつがえしゃ）が設置され、高松で事務を行うことになります。明治23年には、陸軍省の管理下にあった高松城が松平家に払い下げられ、城内の整備が進められるとともに、松平家の人々の香川来訪の機会が増える契機となりました。

明治36年に12代当主となった頼寿（よりなが）は、毎年のように香川を訪れ、香川県教育会会長、香川県育英会会頭など県内でも多数の公職を務めました。廃藩後も続いた松平家と旧領地との強い結びつきによって、近代以降の香川に関係するさまざまな資料が松平家に残されています。

本展では、それらの中から、明治31年に設立された香川県工芸学校（明治34年香川県立工芸学校に改称、現 香川県立高松工芸高等学校、以下「工芸学校」）に関係する資料に着目します。工芸学校は、「勧業知事」と呼ばれた徳久恒範（とくひさつねのり）県知事のもと、石川県・富山県で工業・工芸学校の設立に尽力した納富介次郎（のうとみかいじろう）を校長に招いて開校します。

開校に合わせて木材彫刻課の教諭として赴任した桑根常三郎（くわねつねさぶろう）は、松平家が初代藩主頼重（よりしげ）を祀るため造営した玉藻廟（たまもびょう）に掲げる扁額、神殿内に奉納した獅子（ししゅ）（図1）を制作しています。

大正11年（1922）に香川県内で行われた陸軍特別大演習の際には、松平家の別邸披雲閣（ひうんかく）（重要文化財）が人本営として使用され、摂政宮（のちの昭和天皇）御座所の家具の制作を工芸学校に依頼しています。

図1　桑根常三郎　獅子（附台座）
明治37年（1904）

また、昭和9年（1934）、高松の栗林公園内に完成した松平頼寿の銅像の作者に選ばれたのは、工芸学校の第1期生として入学し、桑根の指導を受けた藤川勇造でした。

図2　竹内友吉　摂政宮使用 椅子　大正11年（1922）

このように、松平家にとって香川での重要な出来事に、工芸学校の関係者が関わっている事例を見つけることができます。これらの資料を通して、松平家と工芸学校や工芸学校ゆかりの作家との関係を考えてみたいと思います。

（学芸課長　野村 美紀）

図3　藤川勇造　松平頼寿伯爵像（試作）
昭和9年（1934）

頼寿が設立した、東京の本郷学園に残るエスキスから鋳造したもの。
栗林公園北庭に設置された松平頼寿像は、戦時中に供出されて現存しない。

展覧会情報

常設展示室1　高松松平家と県立工芸高校
令和4年1月2日（日）～2月27日（日）

ミュージアムトーク
令和4年1月15日（土）、2月13日（日）　各13：30～

展示室だより　常設展示室2

アート・コレクション
Colors Ⅰ 色彩に遊ぶ ― 野見山暁治（のみやまぎょうじ）・木村忠太（ちゅうた）

福岡県飯塚市出身の野見山暁治（1920～）は、昭和27年（1952）にフランスに渡り、その後12年間パリで画業の礎を築き、帰国後は制作とともに東京藝術大学で後進の育成にあたります。平成26年（2014）に文化勲章を受章し、本年101歳を迎える現役画家です。

一方、高松市出身の木村忠太（1917～87）は香川県立工芸学校に学び、中退後上京し、画業に専念します。野見山に遅れること数か月、昭和28年にフランスに渡り、以降終生フランスで活躍し、昭和59年に芸術文化勲章（シュヴァリエ）を受章。時に「魂の印象派」と評されました。

木村忠太　丘の上の木々　1985年
油彩・カンヴァス

木村がパリで最初に出会った日本人が野見山でした。野見山は「明日のことを思うと怖ろしいが、見当のつかない異郷にあえてぼくたちは身を投げ出している。」と当時を回想しています（野見山暁治『異郷の陽だまり』生活の友社、2011年）。ともに戦後の混沌とした日本を脱し異郷の風土に戸惑いながら、それぞれの道を模索し見出していきます。

野見山暁治　ここに居る　2019年　油彩・カンヴァス

今回は近年新たに収蔵した作品を初公開します。激しくも華やかな色彩を画面に放ち、ひたむきに色彩に遊ぶ二人の競演をお楽しみください。　（主任専門学芸員　窪美 西嘉子）

展覧会情報

常設展示室2
アート・コレクション Colors Ⅰ 色彩に遊ぶ ― 野見山暁治・木村忠太
12月14日（火）～令和4年3月21日（月・祝）
ミュージアムトーク
令和4年1月16日（日）、2月19日（土）　各13：30～

展示室だより　常設展示室4・5

アート・コレクション
Colors Ⅱ 響きあう色彩 ― 江戸健（えどけん）

丸亀市出身の江戸健（1927～2017）は、豊かな色彩の抽象画を多く描いた洋画家です。

江戸が色彩に強い思いを寄せるようになったきっかけに、師・猪熊弦一郎との出会いがあります。昭和23年（1948）春に上京した江戸が初めて猪熊宅を訪れた際、猪熊は江戸が持参した作品を「色がない」と評しました。江戸は後年、このことが色彩へと向かった原点だと振り返ります。その後、武蔵野美術大学を中退し、猪熊に師事した江戸は新制作協会で出品を重ねます。昭和50年には長く勤めた小学校教員を辞めてパリに発ち、8年間のフランス滞在中にはサロン・ドートンヌで活躍しました。

江戸の抽象画は滞仏以降、おぼろげな形の色面を重ねるようになり、響きあう色彩は深く静かな美しさをたたえています。青年時代の闘病や、世界各地へ旅したこと、そんな沢山の記憶が降り積もり、複雑な色の重なり合いに滲み出ているようにも思えます。

本展では当館のコレクションより、1950年代から2000年代にわたる作品をご紹介します。

（専門学芸員　一柳 友子）

江戸健　隠された伝言　2002年
油彩・カンヴァス

展覧会情報

常設展示室4・5
アート・コレクション Colors Ⅱ 響きあう色彩 ― 江戸健
令和4年1月22日（土）～3月21日（月・祝）
ミュージアムトーク
令和4年1月22日（土）、2月27日（日）　各13：30～

Notes for Research

調査研究ノートvol.42

香川初の映画館はどこか?

香川県には戦前、都市部（高松・丸亀・坂出・善通寺・観音寺）に約20館ほどの常設映画館があり、地域の芝居小屋や学校でも不定期に映画を上映していました。

戦後、館数は急増し、昭和32年（1957）には100館を超え、県内ほとんどの市町村に映画館が存在しました。

では、香川県で最初に常設での映画上映をした施設はどこにあったのでしょうか。

活動写真の上映

フランスで映画が発明されてから2年後の明治30年（1897）、日本に初めて映画が輸入され、神戸で上映されました。当時は全国を廻る巡業隊が、既存の芝居小屋や仮小屋で興行していました。まだ映画という言葉もなく、活動写真と呼ばれていました。

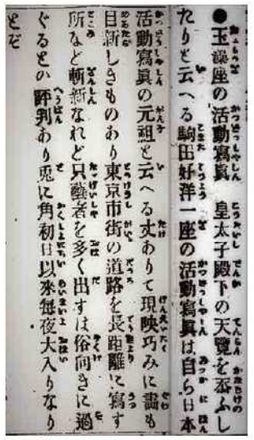

●玉藻座の活動寫眞　皇太子殿下の天覽を忝ふしたりと云へる駒田好洋一座の活動寫眞は自ら日本活動寫眞の元祖と云へる丈ありて現映巧みに畫も目新しきものあり東京市街の道路を長距離と寫す所など斬新なれど只藝者を多く出すは俗向きに過ぐるとの評判あり兎に角初日以來無夜大入りなり

図１　『香川新報』
明治３５年（1902）５月１３日付

駒田は明治35年5月にも高松市片原町にあった芝居小屋「玉藻座」で興行しています。当時の新聞、『香川新報』にも記事が掲載されており、盛況ぶりが分かります（図1）。

芝居小屋から活動写真常設館へ

明治36年に、日本最初の常設映画館「電気館」が東京浅草に誕生し、明治40年以降、全国に映画館建設が広がります。

香川県では、明治44年1月1日、高松市片原町の古天神（華下天満宮）境内にあった芝居小屋「肥梅閣」が常設映写場「世界館」として開館しました。同年5月3日には、丸亀市の「稲荷座」が活動写真館「世界館」として開館。翌年6月11日、「玉藻座」も芝居小屋から活動写真常設館として開館しました。どれも既存の劇場を改築したものでした。

常設映画館として初めて新築されたのは「緑館」です。大正元年（1912）10月25日、高松市東瓦町に開館しました。残念ながら写真は確認できませんが、当時の緑館の挿絵が残されています（図2）。『香川新報』によると、ハイカラで2階は柱が1本もなく畳席と長椅子席があったようです。実はこの年、4月30日に高松電気軌道が開通し、出晴駅（現 ことでん瓦町駅付近）が開業しています。新しい駅の近くに3階建の華やかな映画館。明治末期の高松市中心部の発展と映画館建設には深いつながりがあったのです。

図２　「香川・徳島両県官民肖像録」

県内初の映画館

今回の調査から、片原町の「世界館」が県内初の常設映画館であると結論づけることができます。また、高松や丸亀では比較的早い時期から映画が受容されていたことも確認できました。

その後大正時代になると、常設映画館は、高松4館（図3）、丸亀4館、坂出2館、善通寺2館、観音寺2館と県内各地に広がり、大正モダンの一端を担うこととなります。

（専門職員　高木 理光）

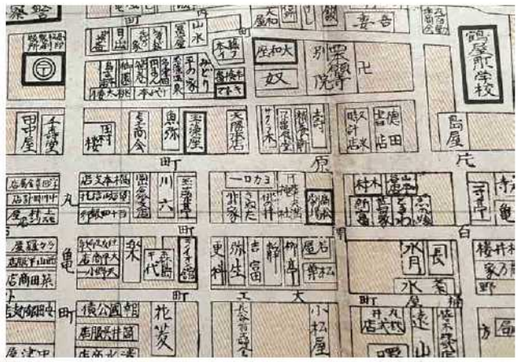


図３　「大日本職業別明細図之内　香川県」　昭和３年（1928）発行。
玉藻座・キネマクラブ・ライオン館・高松劇場の４館が確認できる。

関連展覧会

常設展示室4・5
私の町にも映画館があった

10月29日（金）～12月19日（日）

ミュージアムトーク
11月27日（土）、12月12日（日）　各13：30～

収蔵資料

「草薙金四郎文庫」をひも解く

― 終戦直後の香川の民俗研究史へのアプローチ ―

終戦直後の香川の民俗研究史とは

私が今、関心を寄せていることの一つが終戦直後の香川県の民俗研究史です。

「讃岐民俗研究会」は香川で最初の民俗研究団体で、柳田国男や折口信夫の指導を受けた武田明（1913～92）が郷里多度津に戻り、同志とともに昭和13年（1938）に設立しました。同会が戦前期に会誌『讃岐民俗』（活字版）を4号まで発行したことは既に知られています。しかし、終戦後、研究会や会誌がどうなったかの詳細は不明なのです。県内の図書館資料には手掛かりはありませんでした。

昨年度末に発表された「香川県における文化財関連年表」（『香川県文化財保存活用大綱』付表、令和3年2月県教育委員会発行）にも驚かされました。そこには戦後、国が文化財保護法を制定する前年の昭和24年に、香川県教育委員会（以下「県教委」）が独自に「香川県民俗調査会規程」をつくり県内の民俗調査を始めたとあったのです。なぜ、香川で戦後いち早く民俗に特化した調査が始まったのでしょうか。

郷土史の宝箱「草薙金四郎文庫」をひも解く

瀬戸内海歴史民俗資料館（以下「歴民」）では開館以来、歴史資料を数多く収集してきました。現在は多くが県立ミュージアムに移管されましたが、今なお10万点近い歴史資料を歴民で保管しています。

そのうち「草薙金四郎文庫」は香川県を代表する歴史民俗研究者の一人、草薙金四郎（1905～90）の旧蔵資料で、研究図書や雑誌、新聞切り抜きなど、総数1万3,000点に及ぶ膨大な歴史資料群です。これらは香川の昭和時代の郷土史研究にとって宝箱といえる貴重なコレクションです。

手掛かりがなかった讃岐民俗研究会の動向ですが、この「草薙金四郎文庫」の中に戦後復刊された『讃岐民俗』と、県教委の民俗調査報告書が収蔵されていました。「灯台もと暗し」でした。

昭和22年、『讃岐民俗』第2巻第1号が7年ぶりにガリ版刷で再刊されていました。昭和24年に刊行された第3巻第1号には、高松、丸亀か塩飽の島で社会科の講習を兼ねて民俗学の会を準備中であるという記述がありました。

香川県民俗調査会による第1回調査についての報告書『高見・佐柳島民俗調査報告』（昭和25年／草薙金四郎文庫所収）では、次のように記されています。

> 我々の祖先の生活を偲ぶよい伝統、美しい伝承も新時代のめまぐるしい進展とともにほとんどその跡を絶とうとしています。（中略）七月十三日の教育委員会に付して「香川県民俗調査会規程」を公布すると共に、武田明氏外六名の調査委員を委嘱して研究調査を開始した。（中略）社会教育上又学校教育上色々と参考になる点も多いと思われるので、あらゆる機会に出来るだけ利用される様希望するものである。（久保田英一 県教育長（当時）「発刊のことば」より）

終戦後、新教科「社会科」の導入にあたり、新しい学問「民俗学」への教育界からの期待が大きかったことが推察されます。また、同書には次のようにも記されています。

> 昭和二十四年夏の日本民俗学講習会の日に仲多度郡高見・佐柳両島の実地調査を行った。縣下の小、中、高等学校の職員約六十名が之に参加した。（中略）参加者にとっては民俗資料の採集は極めて印象的なもので、この新しい学問に対する研究の興味が前日の講習会の直後であるだけに尚更湧然と沸き起こったであろうと思われた。
>
> （「後記」より）

当時多度津町長でもあった武田明が多忙極めるなか全国規模の日本民俗学会の講習会招致に関わり、民俗学や民俗調査の普及に尽力したことがうかがえます。

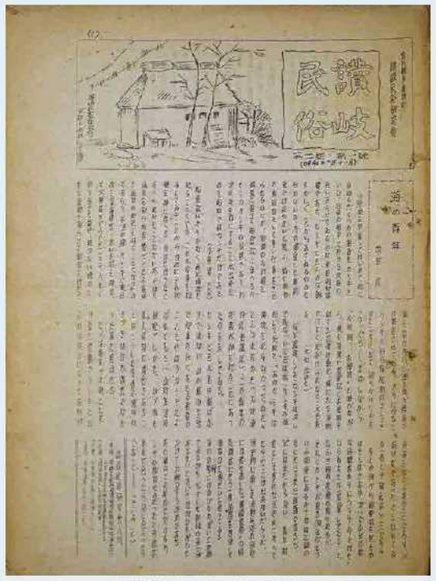
遺し伝えること

「草薙金四郎文庫」という貴重な資料群によって、終戦直後の香川県の民俗研究史の一端を知ることができました。

コロナ禍、フィールドワークに出かけることもままならない日々が続くなか、先輩研究者が遺した蔵書コレクション（文庫）の尊さ、それを収蔵した先輩職員の先見性に感謝しきりです。「よくぞ捨てずに遺してくれた」「よくぞ集めて整理してくれた」と思います。

断捨離が流行っているとも聞きますが、遺し伝えることも大切です。もちろんすべてを遺すことはできませんが、迷ったら博物館や資料館にご相談ください。

（瀬戸内海歴史民俗資料館長　田井 静明）


復刊『讃岐民俗』（第２巻第１号・昭和２２年）

INFORMATION［2021.11－2022.3］

講演会　聴講無料・要事前申込

特別展「第68回日本伝統工芸展」関連行事

◎「藍胎蒟醤 ― 僕と太田先生との思い出 ―」

令和2年、新たに重要無形文化財「蒟醤」保持者に認定された大谷先生に、藍胎蒟醤の魅力、師である太田儔先生との思い出、今の生活の中に溶け込む漆工芸作品の制作について等をお話しいただきます。

日　　時：令和４年１月８日（土）13：30～15：00
会　　場：地下１階　講堂
講　　師：大谷早人氏（重要無形文化財「蒟醤」保持者）
定　　員：100 名（要事前申し込み、先着順）
申込期間：12 月８日（水）～、定員になり次第終了

講座　聴講無料・要事前申込

◎ミュージアム・スーパープレゼンテーション2021

当館では美術、歴史、民俗などについて、日々様々な活動が行われています。今年度の活動を通じて考えたことを担当者がリアルにプレゼンします。

日　　時：令和４年２月 26 日（土）13：30～15：00
会　　場：地下１階　講堂
講　　師：当館職員４名程度
定　　員：100 名（要事前申し込み、先着順）
申込期間：令和４年１月 26 日（水）～、定員になり次第終了

講演会・講座の申込方法

電話、はがき、FAX、「かがわ電子自治体システム」（※）を利用したインターネットから。はがき、FAXの場合は氏名、電話番号、行事の名称を明記してください。
申込先：〒760-0030　高松市玉藻町５番５号　香川県立ミュージアム学芸課
TEL.087-822-0247　FAX.087-822-0049

※「かがわ電子自治体システム」を利用する場合
香川県立ミュージアムホームページ右下の「**関連リンク**」から「**【香川県】電子申請のページへ**」をクリックしてください。

行ってきまーす

当館コレクションの館外貸出情報です。

◎**水戸市立博物館**「徳川頼房 ―初代水戸藩主の軌跡―」
10月16日～11月21日：「水戸御祭礼図」等6件
◎**徳島県立近代美術館**「子どものころ」
10月9日～11月28日：猪熊弦一郎「自動車と家族」等5件
◎**宇和島市立伊達博物館**「武具の煌めき ―武家のPRIDE―」
10月9日～11月28日：「白糸威大鎧」等8件
◎**高知城歴史博物館**「藩が消えた日～四国の廃藩置県～」
9月17日～11月29日：「領知宛行状案」等10件
◎**丸亀市猪熊弦一郎現代美術館**「藤島武二と猪熊弦一郎展 サンプリシテとシンプル」
9月18日～12月5日：藤島武二「五剣山の日の出」
◎**九州国立博物館**「海幸・山幸 ―祈りと恵みの風景―」
10月9日～12月5日：「衆鱗図 第1帖」
◎**ザヘンタ国立美術館**（ポーランド・ワルシャワ）
「集団と個の狭間で ―1950年代から60年代の日本前衛美術展」
11月25日～令和4年3月13日：吉原治良「作品（黒地に白円）」

SNSで最新情報や解説動画を配信中!

◎**Twitterアカウント**
香川県立ミュージアム　@kagawamuseum
瀬戸内海歴史民俗資料館　@PrefSetorekishi

◎**Facebookページ**
「香川県立ミュージアム」
Facebook ▶

◎**YouTubeチャンネル**
「香川県立ミュージアム」
（歴民と共用）
本誌3頁のQRコードから
アクセスできます

瀬戸内海歴史民俗資料館

瀬戸内ギャラリー　第３回企画展

「国讃めと屍 ― 藏本秀彦・水谷一 美術展 ―」
（瀬戸内アートコレクティブとの共催）

柿本人麻呂が沙弥島を訪れた際に、岸の岩場に倒れた亡骸を見て詠んだ歌からイマジネーションを広げた2人の現代美術作家が、瀬戸内の「海と鎮魂」をテーマに創作した絵画とインスタレーションを展示します。

会　　期：開催中～12 月 19 日（日）
会　　場：第１展示室２階　瀬戸内ギャラリー

瀬戸内ギャラリー　第４回企画展

「歴民館長の“瀬戸内・民俗”本箱」

歴民館長が自らの蔵書からセレクトした「瀬戸内をより深く知るための本」や「民俗をより理解するための本」を紹介します。ギャラリーの椅子に腰かけ、手にとって見たり読んだりしていただけます。

会　　期：令和４年１月４日（火）～３月 21 日（月・祝）
会　　場：第１展示室２階　瀬戸内ギャラリー

共通
開館時間：9：00～17：00　※入館は 16：30 まで
休 館 日：月曜日　※２月 28 日（月）～３月７日（月）は、館内清掃・資料整理等のため臨時休館します
観 覧 料：無料

れきみん講座　聴講無料・要事前申込

◎「民俗学・資料館へのいざない」

香川県の民俗の特徴や、資料館が有する文化資源とその活用について紹介します。

日　　時：令和４年２月 19 日（土）午前の部 10：00～11：00
　　午後の部 13：30～14：30
会　　場：瀬戸内海歴史民俗資料館　研修室
講　　師：田井静明（瀬戸内海歴史民俗資料館長）
定　　員：午前・午後 各 12 名（先着順）
申込期間：令和４年１月 18 日（火）～、定員になり次第終了

れきみん講座の申込方法

電話または直接来館で。
申込の際に、氏名、電話番号、講座名（午前・午後）をお伝えください。
申込先：瀬戸内海歴史民俗資料館　TEL．087-881-4707

カフェポット ミュゼ

「うるしの器でほっとひと息」
郷土料理「あん餅雑煮」を漆の器でご用意します。
（販売期間：令和４年１月２日～16 日）
営業時間：9:00～17:00（オーダーストップ 16:30）

ミュージアムショップ

第 68 回日本伝統工芸展に開催に合わせ、関連書籍を取り揃えております。

営業時間：9:00～17:00

香川県立ミュージアム
〒760-0030 高松市玉藻町5番5号
TEL.087-822-0002（代表）　FAX.087-822-0043
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/kmuseum/

【分館】**瀬戸内海歴史民俗資料館**
〒761-8001 高松市亀水町1412-2
TEL.087-881-4707　FAX.087-881-4784
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/setorekishi/

【分館】**香川県文化会館**
〒760-0017 高松市番町1丁目10番39号
TEL.087-831-1806　FAX.087-831-1807
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/kmuseum/bunkakaikan/

日時・内容については変更になる場合があります。最新情報は当館ホームページをご覧ください。

●発行日 令和3年（2021）11月18日　●編集・発行 香川県立ミュージアム　●印刷 株式会社太陽社